

自然保護×地域



です。

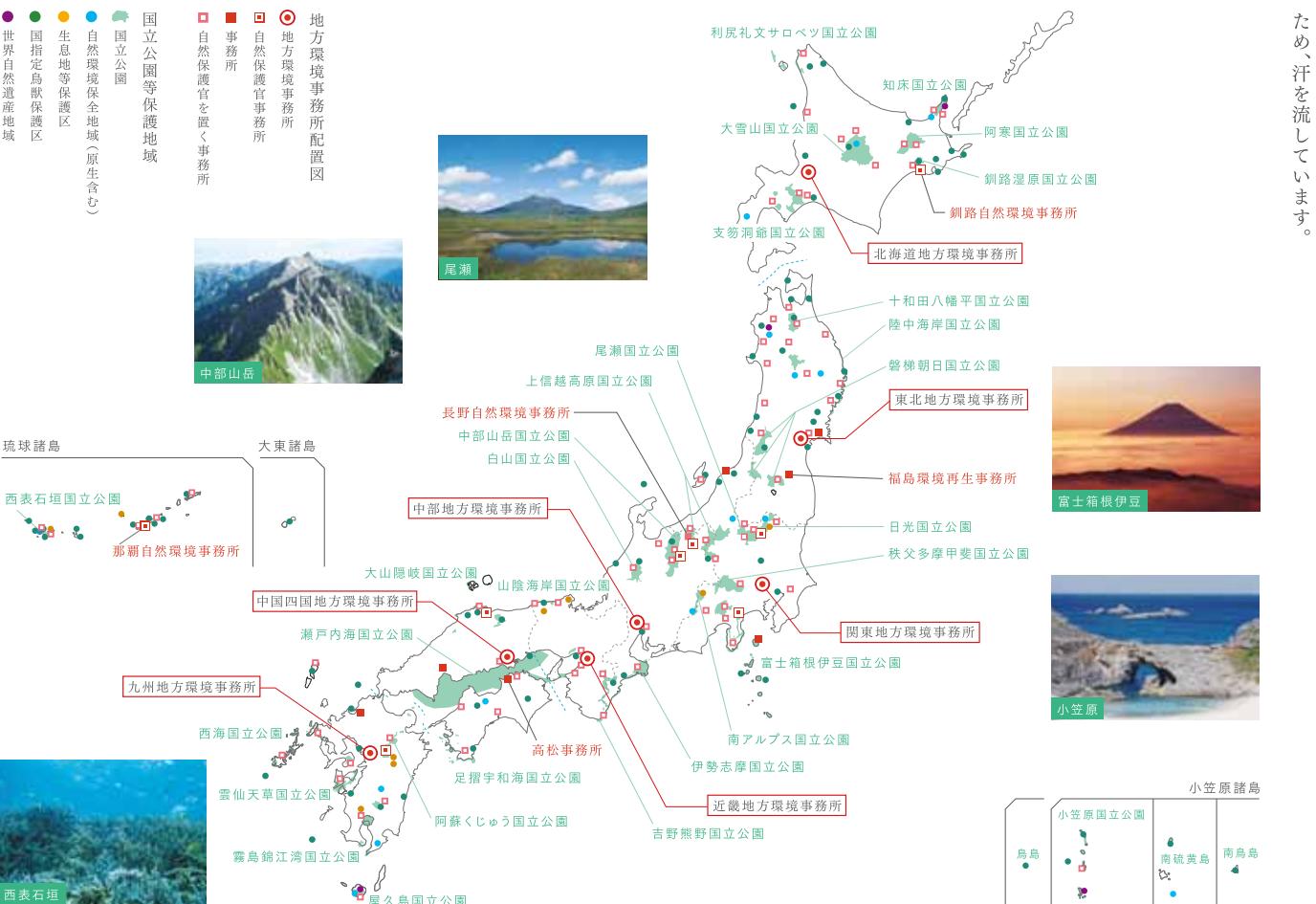
放されたトキについては、モニタリングをおこなっています。環境省レンジャーである私をはじめ、非常勤職員のアクティブランジャー、コンサルタント、新潟大学の職員、市民のボランティアさんたちとチームをつくり、エサをとりに降りる田んぼはどこか、繁殖期の様子はどうかななど、早朝にねぐらから出るところから追跡し、ほぼ365日観察をつづけています。2012年4月にはうれしいニュースがありました。放鳥したトキの3組のカップルから、8羽のヒナが産まれ、自然界での孵化が36年ぶりに成功したのです。2010年と2011年は、5組と7組が卵を産みましたが、孵化しませんでした。理由を分析しても、なかなか決め手がない中で、放鳥をつづけてきた矢先のことでした。孵化した8羽のトキは幸いにもぜんぶ巣立ち、今も元気です。私は、佐渡の地域のみなさんといっしょに、成長を見守っているところです。



**佐渡を、
トキと人間が共に生きる島にします。**

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（通称・種の保存法）に基づき、国内希少野生動植物種に指定されているトキの保護増殖事業「トキの野生復帰プロジェクト」の現地統括責任者をしています。職場は、新潟県佐渡市の佐渡トキ保護センター野生復帰ステーションで、敷地内には40000平米ほどの順化ケージが整備され、トキが生息するための棚田の環境を再現しています。池があり、トキのエサとなるドジョウもあります。人間ができるのは、トキ自身の生きる力を信じ、本能発揮のきっかけをつくることだけです。トキはこの訓練用の大きなケージの中で飛ぶ力をつけ、くちばしの感覚で泥池からエサを探すことを身につけ、野外で出会うことになるクルマで近づく人間に慣れる訓練をして放されます。この5年間で、91羽のトキが佐渡の空へ放たれました。





トキを増やすことは、島の資源を守ること。放鳥に依存しなくても数が安定することが理想ですが、そのためには佐渡の地域社会も安定しなければなりません。佐渡は高齢化や人口減少という厳しい現実を抱えています。佐渡の場合、農業が農村を支え、農村がトキを支えている。田んぼが失われれば、トキと共生していくことが、とても大切なテーマなのです。そのため、私たちは講演会を開いたり、集落におじやまし地域の人たちとこのような話をよくしたりします。トキがいることが、地域の人たちにとって心理的にも経済的にも利益をもたらすものになるよう、いろいろなアイデアを考えたり、新しい仕組みをつくっていったり、ルールづくりもする。今では、集落の人たちも春まつりでトキの繁殖に影響が少なくなるよう家々を回る時間を変更するなどトキに配慮する生活を送るようになっています。

全国で活躍している、レンジャーたち。

レンジャーは、主に全国の国立公園の管理を行うとともに、国指定鳥獣保護区、自然環境保全地域などの保護や整備、自然とのふれあいの推進、希少野生動植物の保護増殖などに当たっている自然勤務では、「自然保護官」と呼ばれ、自治体や地域の関係者と協働しながら豊かな自然環境の保全のため、汗を流しています。

くつたり、冬に水を貯めたり、田んぼと水路をつなぐ魚の道を作ったり、農薬を減らして育てたりしたお米にはトキマークがつけられて、少し高い値段で売ることができるというものです。私は、トキという一種類の生物資源を何とか残すことを考えるとき、このような地域固有の資源が、その地域を持続させるひとつ力になることを証明していかないとけないと、佐渡という島のトキと関わっていると強く感じます。佐渡に暮らして仕事をしていると、島の人たちの気持ちが見えてきます。トキのいる島に暮らすことはしあわせだと、島の人々に感じてもらえばうれしいと思っています。



トキが舞い降りる田んぼから、ブランド米ができました。